『ドン・キホーテ』の人物像に関する一考察

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>松田 侑子</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学位名</td>
<td>博士 学位</td>
</tr>
<tr>
<td>学位授与番号</td>
<td>甲第 111号</td>
</tr>
<tr>
<td>学位授与年月日</td>
<td>2012年3月</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00000481/">http://id.nii.ac.jp/1085/00000481/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Creative Commons 権利情報:
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja
２．博士論文審査の要旨
ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラの『ドン・キホーテ』は、1605年に前編が発刊され、1615年には後編が出版された。『ドン・キホーテ』におけるドン・キホーテ的人物像に関しては、多くの論文や著作が出ており、かなり定まったイメージが描かれていると言う。しかし、もう一人の主人公ともいえる従者のサンチョ・パンサに関しては、この人物をどのように捉えるのかという点に関して、新たな説も提唱されており、未だに議論が続いています。

本論文執筆者は、サンチョ・パンサ的人物像を解明するには、ドン・キホーテの性格をもう一度検証する作業が必要だと考え、「騎士道精神」、「狂気」などの概念を総合的に分析している。

そのうえで、サンチョ・パンサに関しては、近年新たに示されている「相互作用」としての「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」というテーマに取り組み、この新しい説の展開が実は曖昧なものでないと、という疑問を投げかけている。この疑問を解き明かすために、著者は丹念に原典を読み、同時に多くの文献を精査して、ドン・キホーテがサンチョ・パンサから受ける影響は極めて小さいもので、結論として「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」は存在しないことを明らかにしている。論展開にも少し厳格さが要求される箇所もあるが、全体としてはよく構成されており、このことから、本論文は高い評価に値すると判断する。

論文審査結果
論文執筆者の松田侑子氏は、修士課程在学中から一貫して『ドン・キホーテ』に登場するさまざまな人物像に興味を抱いてきた。とりわけ、主人公であるドン・キホーテと従者のサンチョ・パンサに特別の関心を寄せ、両者がどのような関係で描かれているのかを新しい視点で捉えようとしてきた。通常、ドン・キホーテは騎士道物語を読みふけってしまったため正気を失ってしまい、自身を逼迫の騎士と思いこみ、冒険に出かける人物として考えられている。

普段は博識で有能な人物として登場するが、騎士道物語や想い出のドゥルシネーユに話が及ぶと正気を失い、まわりは魔法によって作り出されたものであると思い込み、幻想の世界に入り込むが、その高潔な騎士道精神から、理想主義者と呼ばれてきた。これに対してサンチョは、ドン・キホーテが約束した報酬に心を動かされ、冒険を共にすることになった人物として描かれている。この従者はドン・キホーテから見ると、善気な人間だが、少し頭もその足りない男として登場する。しかし、実際の生活に関することであれば、知恵を働かせ、機転をきかせて物事に対処しており、このことから現実主義者と言われてきた。
本論文ではこのようなわかりやすい一般的に流布した理解、つまり、ドン・キホーテは勇ましい騎士であり理想主義者であるのに対して、サンチョ・パンサは実利主義者で臆病な田舎者であるという人物像を極めて一元的なものとして疑問視する。たとえば、ドン・キホーテの狂気を取り上げただけでも、その様相はさまざまなであり、単純に「狂気」という形でひとくくりにすることはできない。また、サンチョ・パンサの実利主義にしても、多様な状況でさまざまな様相を示している。

ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラの『ドン・キホーテ』の人物像を取り上げた本論文は、序章と三章および結論から成っている。

序章において、執筆者は本論文の目的を明確にしている。『ドン・キホーテ』の主人公であるドン・キホーテとその従者のサンチョ・パンサが相互に影響しあっているという「相互影響説」に焦点を当てその正当性を論じるものである。一般論としては、二人の人物が同じ時間を共有すればするほど、両者は影響しあうといえる。片方だけの影響ということは王と奴隷など特殊な場合を除いてありえないと想定するのが自然であろう。『ドン・キホーテ』における両者の場合も、互いに影響を与えあっており、これまでの研究では、ドン・キホーテがサンチョ・パンサ化している、またサンチョ・パンサがドン・キホーテ化していると言われてきた。本論文では、この二つの現象、つまり「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」と「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」を取り上げ、この点に関する従来の研究を検証し、多様な角度から両説を比較・分析し、この二つの説が同質のものではないことを証明しようとする。

結論として「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」は存在するが、「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」と言えるほどの現象は存在しないこと明らかにしようとしている。このことは、従来のドン・キホーテ研究には見られなかったものである。

第一章ではドン・キホーテの人物像に関する検証を行っている。本論文では、まずドン・キホーテの狂気が触発される原因になった騎士道精神を取り上げる。ドン・キホーテの狂気は、騎士道に触れると起こるものであり、登場人物の多くがドン・キホーテを「狂気と愚鈍の化身」と見なしているが、他方ドン・キホーテを単純な狂気の持ち主だと思っていない登場人物も少なくない。松田氏は、マドリアーガを引用しながら、実はドン・キホーテが単純化された人物像として捉えられているのはある種の批評の伝統のせいであり、ドン・キホーテが「単純な人物」ではなく、多くの「曖昧性」を有していることを原文から多くの例証を示しながら明らかにしている。この結論は特に新しいものとは言えないが、これを原文から具体的に例を引き、明確な分析を加えているのは高く評価できるよう。また、本論文ではドン・キホーテの言葉に関しても詳細な分析を加えられている。ドン・キホーテには騎士道物語の主人公の言葉遣いを真似るためにアルカイズムの言葉遣いが見られると指摘し、それを具体的に示している。

さらに、ドン・キホーテが「衰退」していく際には、こうしたアルカイズムも変化することを明らかにしている。

ドン・キホーテの狂気に関しては、松田氏はそもそも「狂気」とはどのようなものとして捉
えられてきたかを明らかにした後、ドン・キホーテに関する「狂人説」と「正気が入り交じった狂人説」に加えて、近年一部の研究者によって主張されてきた所謂「狂狂説」を紹介しつつ、この説に疑問を呈する。「狂狂説」は、郷土アロンソ・キーハーノが自らの意志で狂ったぶりをされていると解釈する説であるが、本論文では、ドン・キホーテの持つ「狂気の実態を明確に分析した上で、この説を主張する研究者の根拠の曖昧さを指摘して、この説は受け入れられないと結論づけている。その説明は明快であり、かつ説得力のあるものだと言えよう。

第二章では、サンチョ・パンサの人物像に関して、この人物がドン・キホーテと同様に単純な人物ではないことが示される。一般に考えられているような「狡猾で現実的」な一面だけを持つのではなく、いくつかの「両面性」がこの人物に存在することが明らかにされる。この指摘は、松田氏が初めてではないが、原文から具体的に指摘していることと、この概念が本論文が主張する「相互影響の否定」に大きく関連する点を考えれば、その視点は斬新なものだといえる。

サンチョ・パンサの持つ「両面性」はいくつかのタイプに分類される。すなわち、「強欲と禁欲」、「親愛と裏切り」、「現実直視と非現実直視」、「愚病と勇敢」、「愚鈍と知恵」である。

いずれも相反する概念であるが、サンチョ・パンサにはこうした対立する性格が存在すると指摘する。ただし、本論文では、サンチョ・パンサの性格が「相反する」と定義される場合に使われることがある「アンヴィレント」という言葉は定着的な意味合いを含むため、Mauricio Molho が用いている「アンビギュアティ（曖昧）」を使うべきであるとの述べているが、その論拠は十分な説得を持つものである。また、本論文で分析されたこうしたサンチョ・パンサのこのような「性格」は、原文のどこに特徴的に描かれているか正確に示されており、当時の社会情勢などを背景にして的確な分析がなされている。さらに、こうした「対立的な」関係は、単に２項対立だけではなく、それぞれが関係することが起こる多層的な構造になっていることも明らかにしており、この点は高く評価できる。

第三章では両者の「相互影響」を取り上げている。本論文では、「相互影響」に関して２０世紀初頭にミゲル・デ・ウナムーノが『ドン・キホーテ』に関して行った論述の重要性が指摘されている。ウナムーノによれば、初めはドン・キホーテに依存するだけだったサンチョ・パンサが、次第に教育され、精神性を高めていく、ついにはドン・キホーテから「自立」するのである。他方、ドン・キホーテは少しずつサンチョとの関係で主導権を失っていく、その狂気も弱まっていく。本論文ではこの点に関して、二つのグループに分けている。「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」と「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」の両方を認めるグループと「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」だけを認めるグループである。この場合、「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」は両者のグループが共通して認める概念である。

本論文ではすでに従来の研究で認められているこの概念も再現に原点にあり、サンチョ・パンサの主人公から受けた教育、精神の向上などを詳細に分析し、ガブリエル・タルドの模倣論を基礎にしながら、改めて間違いのないことを確認している。これこそ論文執筆上の手法とし
て確実なものだと言えよう。次に、本論文では「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」に関して、まったく否定しているわけではない。特にその根拠となっている論の使用とドン・キホーテの「衰退」について分析し、多くの影響があったとしてもこれは「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」には当たらないと判断している。結論として、『ドン・キホーテ』の主従の間に「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」と呼ばれるほどの影響は見られず、「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」だけが存在すると判断している。「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」説があるのは、ウナムーノの「相互影響」説の解釈の違いによるものだと結論づけている。

以上のように、本論文は古典の名作として読む娘がしてきた『ドン・キホーテ』の人間像として、ドン・キホーテとサンチョ・パンサに関するさまざまな問題点を明らかにして、その解決を試みており、その成果が認められる。従来の研究を丹念に精査し、綿密に原文を読み解き、一つの結論を導き出したのは高く評価できる。論展開に多少無理のある箇所や十分に説得力を備えていない表現も散見されるが、全体として本論文は本学大学院博士論文として申し分のない内容と体裁を備えているものであるといえる。

最終試験結果
最終試験は、2012年２月15日、本学三木記念会館で実施され、西川栄（主査）、福岡隆、野村竜仁の3名の本学教員と関西大学の平田渡教授が審査にあたった。審査は公開で行われ、最初に学位申請者が論文要旨を述べた後に、各審査委員が論文に対する意見・感想を述べ、これを踏まえて質問を行い、申請者がそれに回答するという形式で進められた。

審査員からは、模倣という概念でドン・キホーテとサンチョ・パンサの相互影響を説明しようとした意図は何故か、またこれは他の物語の主従に適合するのか、引用した研究書に関する発表者の見解は妥当であるか、参考文献の提示にもう少し工夫が必要ではないか、表現をもう少し簡潔にできる箇所があるのではないか、など多くの質問が出された。申請者はこれらの質問に対し誠実に回答し、各委員の意見や感想に対しても説得力のある見解を述べた。最後に、申請者は会場からの質問に対して回答し、公開審査は終了した。

公開審査後、4名の審査委員は別室で協議を行った。各委員がそれぞれの見解を述べた。学位申請者が一見平易にみえるが実はかなり難解なテーマに取り組み、原文を深く読み込み、独自の見解を提示するに至ったことが評価された。そして、本論文が本学大学院博士課程の博士（文学）の学位を授与するのに十分な成果を収めたということを審査員全員が認め、最終結果を「合格」とすることが決定された。